

～男女共同参画社会を考える情報コーナー～

With you

あなたと
いっしょに・・・

第7回

～ 介護は誰がするの？ ～

日本は、世界でも1位の長寿国です。長寿は大変喜ばしいことですが、同時に高齢者の介護は避けて通れない問題になってきています。

例えば、寝たきり者の介護の8割を女性が担っており、その負担は女性側に偏っています。さらに、高齢社会の現在、介護を必要とする人は今後も増え、寝たきり期間の長期化や老々介護など、その負担は極めて大きくなることが予想されます。

これまで、「男は仕事、女は家庭」という性別による固定的な役割分担からくる意識のため、女性が介護をすることは当たり前と思われてきました。実際に、40歳以上の女性の離職者の1割は、身内の介護を離職の理由としており、新たに介護以外の経済的な問題も生じてきています。

そこで、これらの負担や問題を個人が背負うのではなく、社会全体で支え合おうということから、育児介護休業法が制定され、介護保険のサービスも開始されました。

これからは、介護サービス等を利用しながら、男女がお互いに協力して介護するとともに、介護する人も介護される人も、長い人生を自分らしく自由に豊かに生きていく社会について、みんなで考えることが必要です。

高齢社会の介護のあり方について、一緒に考えてみませんか。

介護をとりまく現状は



2015年には
4人に1人が65歳以上

ズームイン おじゃましま～す!



「今度は、家族にごちそうを作るぞ！」
(男の料理教室にて)



「みんなで仲良く元気に、長生きするべな。」

インタビュー

「ともに生きる」

〜妻に楽しい人生を〜

結婚されて45年、介護歴11年という安藤秀雄さんにお話を伺いました。妻和子さんは、平成2年に脳梗塞で倒れ、一時は死を宣告されましたが、秀雄さんの献身的な介護により、現在は少しずつ自分で歩けるまでに回復されています。



在宅で介護をしようと思ったきっかけは、何でしょうか。

妻の状態が落ち着き、リハビリを始めた時、主治医が「病院より、不便でも家で生活したほうが、和子さんのためになる。」と助言してくれたからです。

不安ではありませんでしたか。

確かに不安でしたが、在宅介護を意識してからは、外出許可をも

らい、食事やカラオケに行くなど一緒に外へ出掛けるようにしました。当時は、男が車いすを押す姿は珍しかったのですが、妻に自信を失わせたくない一心で恥ずかしがらずに出掛けました。

介護をしていて、一番大変なことは何ですか。

料理ですね。上げぜん、据えぜんだった私にとつて、料理ほど難しいものはありません。(笑)今は、妻の食事はヘルパーさんに作ってもらうほかに、宅配弁当なども利用しています。

介護で気を付けていることは、何ですか。

妻が、転ばないように見守ることです。妻が一人でできると思うことには、絶対に手を貸しません。ずっと見ているのも気がもめるんですが、本人のためと思えばじつと我慢しているんです。(笑)妻がどうしたら楽しい人生を送れるだろうかと考えたとき、妻の自立を目指すのが一番良いと思ったからです。

ストレスはありませんか。

もちろん、ストレスはあります。パンクしそうになるときは、ケアマネジャーさんに話を聞いてもらっています。いい状態で介護す

るためには、私の心のケアも必要なんですよね。(笑)ほかに、ヘルパーさんがいる間、パチンコやグラウンドゴルフをしたり、妻がデイサービスに行っているときは温泉にも行きます。冬は、妻に風邪を引かせないためにシヨートステイを利用してはいるんですが、その間は旅行もしています。私の時間って、結構あるんですよ。

最後に、『夫』が『妻』を介護することについて、何かありますか。

私たちには子どもがいないので、妻の介護は私がするしかありませんでした。少子高齢化が進む中、近くに子どもがいて介護してくれるとは限りません。「男だからできない」なんて言ってられませんが、これからの介護は、みんな考えていかなければならない問題でしょうね。



ありがとうございました。

*ケアマネジャー：介護保険サービス利用計画を作成してくれる

介護支援専門員のことです。

*デイサービス：日帰りで介護施設などに通い、食事・入浴の提供、動作訓練などが受けられます。

*シヨートステイ：短期間施設に宿泊し、介護や機能訓練などを受けられます。

インタビューを終えて

介護歴11年という道のりは、決して平たんではなかったはずですが、家事や身内の介護など全くしたことがない秀雄さんにとつて、一人で在宅介護をするということには想像以上に大変だと思えます。少子高齢化が進む現在、介護問題は誰にとつても身近な問題です。男性と女性がともに考え、また社会全体で考え支え合っていくことが大切だと思います。

終始笑顔を絶やさない和子さん。それを見守りながら話す秀雄さん。お二人のまなざしはとても穏やかで思いやりにあふれています。それは、介護問題を抱えながらも、ともに生き、ともに幸せであることを物語っているように感じました。

これまでのように、家族の介護を女性だけで担うのは、精神的・肉体的負担が大き過ぎます。それは、介護される人にとってもいい状態であるはずがありません。介護する人・される人の両者が共倒れにならないためにも、介護サービスを利用しながら、男女がお互いに協力しあって介護することが、大切だと思います。

いろいろな人たちに聞いてみました》

女の本音

も聞かれました!

- * 小・中学校のころから、何事も男女で協力し合う生活習慣を身につけさせ、介護も男女で担うものという意識づけをしていければよいと思います。(45歳・男・公務員)
- * 祖父母の介護を、一人でふらふらになってやっている母を見て育ちました。プロに、安心して任せられることのできる環境になることを期待します。(39歳・女・会社員)
- * 遠くの親せきより、近所の知人に頼り合える社会になればいいですね。(38歳・女・アルバイト)

男性に質問：あなたが介護を受けなくてはならない状況になったら、誰に介護を頼みたいと思いますか？

1位・妻 女性の方が男性よりも、介護に向いていると思うから。	40% (46歳・会社員)
2位・ホームヘルパーや施設を利用 家族にばかり、負担をかけたくないので。	35% (44歳・薬剤師)
3位・家族 遠慮せず頼めるから。	25% (24歳・サービス業)

男性に質問：今、身内の誰かを介護しなくてはならない状況になったら、あなたはどのようにしますか？

できるだけ家族で介護し、必要に応じて施設やヘルパーの利用も考える。(41歳・会社員)

自分の親は、妻に介護してもらおう。(46歳・会社員)

仕事を辞めることはできないので、介護サービスを受けながら施設等を利用する。(50歳・会社員)

介護は、男性には無理という先入観があります。そうでしょうか。現に、介護施設では男性職員が増えており、男女の差がなく介護に携わっています。家庭においても、男女が協力し合えば、介護する一人ひとりの負担が軽減されます。お互いを思いやり、無理のない介護をしていきたいものです。

八戸市は、「男女共同参画宣言都市」として新たな一歩を踏み出します。

6月議会において「男女共同参画都市宣言に関する決議」が可決され、八戸市は「男女共同参画宣言都市」として、新たな一歩を踏み出し、市を挙げて男女共同参画社会の実現に向けて取り組むことになりました。

そのため、今年度は、男女共同参画推進本部（本部長：内閣総理大臣）内閣府および八戸市の共催で、宣言都市としてふさわしい事業を実施しています。なお、10月31日（水）には、この宣言を記念しての楽しいイベントが開催されます。（詳細については、「広報はちのへ10月1日号」をご覧ください。）

市民の皆さん、「男だから、女だから」ととらわれず、自らの意思で自分らしく生きることのできる男女共同参画社会の実現を目指しましょう。



「男女共同参画宣言都市」のPRのため、実行委員の皆さんが、八戸三社大祭に参加しました。

女性に質問：あなたが介護を受けなくてはならない状況になったら、誰に介護を頼みたいと思いますか？

- 1位・ホームヘルパーや施設を利用
家族には、自分達の生活を第一に考えてほしいから。 (42歳・主婦) 55%
- 2位・娘
遠慮せず頼めて、安心だから。 (40歳・主婦) 30%
- 3位・家族
精神的な安定が得られるから。 (32歳・公務員) 10%
- 4位・夫
精神的に落ち着けるのは、夫だけだから。 (50歳・店員) 5%

在宅で家族が介護をするというのが、理想的なのかもしれません。でも、現実には少子化や核家族化、介護する家族の高齢化などが進み、それは難しいものとなっています。介護保険制度のスタートとともに、介護は新しい時代を迎えました。これからの介護は、家族だけであるものという意識から、社会全体であるものという意識に変えていく必要があると思います。

《介護について、

男の

本音

女性に質問：今、身内の誰かを介護しなくてはならない状況になったら、あなたは どうしますか？

- 仕事をしているので、有給休暇を取りながら、家族が交替で介護する。 (33歳・公務員)
- 仕事をなかなか休めないの、ホームヘルパーを雇う。 (29歳・パート社員)
- 仕事と介護の両立は無理だと思うので、私が仕事を辞めて介護する。 (30歳・公務員)
- 自分に無理がかからないように、ホームヘルパーに頼む。 (54歳・主婦)

こんな本音

介護しなくてはならない状況になると、男性は女性に頼りがちでしたが、働く女性の増加とともに「家族全員で」「ホームヘルパーの手を借りて」と多様性が見られるようになりました。介護問題は、さまざまな家庭状況により違うので、どれが正しいという答えはありません。いざという時のために、日頃から、家族で話し合いができるといいですね。

- *「自分の親の介護を、妻にばかり任せていたら離婚されてしまい、結局、自分が介護した」という話を聞きました。初めから、一緒に介護していれば良かったのに…。 (29歳・女・会社員)
- *「長男の嫁」ということで、5年間、姑の介護を私がしました。夫の兄弟やその妻は、顔を出すだけでした。精神的・肉体的にもきつかった…。 (40歳・女・主婦)
- *自分にはできないと思うのでなく、やってみようという気持ちを男性にも持ってほしいです。 (37歳・女・主婦)

編集後記

将来の生活設計を考えなければと思う、今日このごろです。 (阿部 里恵)
 安藤さんのお話を伺い、私の「夫婦観」が変わりました。 (佐藤千恵子)
 日本は、世界一の長寿国になりました。元気で、長生きできたらいいですね。 (下館 洋子)
 21世紀は、男だから女だからと言い訳のできない時代であることを感じます。 (馬渡 里子)

この記事は、一般公募で選ばれた皆さんが作成・編集しています。

お問い合わせ 企画調整課 男女共同参画室 内線485